David A. Graff *Medieval Chinese Warfare, 300-900*

デイビッド・A・グラフ著『中世中国の戦争　三〇〇～九〇〇年』

丸橋充拓

日本の中国史学界において、軍事史の研究は兵制および兵役負担の問題に関心が集中してきた。前者は中国の諸制度を研究・模倣してきた前近代以来の因縁であり、後者は国家の搾取構造に焦点を当てる史的唯物論に基づく。さらに中国伝統社会に底流する「尚文卑武」の気風、戦後日本社会における忌避感情などが相俟って、軍事というテーマは、その核心であるはずの「武力」ないし「暴力」の問題に十分な光が当てられてこなかった。したがって「戦争」を体系的に論じた研究は極めて乏しい。中国においてもおおむね傾向は近似するといえよう。

これに対し欧米では歴史学全体としてこの方面の研究が長足の発展を遂げている。たとえば一九九四年以降、ラウトレッジ社から刊行されている「戦争と歴史 *Warfare and History*」シリーズ（J・ブラック編、既刊四九冊）は、現代に至るまでの世界各地の戦史研究を網羅しており、中国史関連の著作も三点含まれ、参照すべき点が多い。本稿で紹介するデイビッド・A・グラフ著『中世中国の戦争　三〇〇～九〇〇年』はそのうちのひとつである。

本書の著者グラフ氏はカンザス州立大学准教授。これまで唐代の軍事史を中心に研究を進めている。本書は一九九五年、プリンストン大学に提出された同氏の学位請求論文を基礎に編まれたものであり、一一の章から成る。まずはその構成を概観しよう（章題は拙訳により日本語に改めた）。

序言
一　古代の遺産
二　西晋の滅亡
三　異民族支配下の北方
四　移民支配下の南方
五　北魏から北周へ
六　北方対南方
七　高句麗遠征と隋の滅亡
八　李世民と唐朝の軍事的統一
九　初期唐朝の軍隊と行軍
一〇　募兵化の代価
一一　安禄山の乱の結果
結語

一見してわかるように、中世中国の戦史を西晋末から唐末まで時系列に即して分析するという構成になっている。全体としては、著者自身の既発表論文や、日中欧米の先行研究に基づく総説的な

内容となっており、本書において個別的な実証を行い、新知見を提供する箇所は必ずしも多くない。ただその分、欧米における戦史研究の体系、ないし全体像を俯瞰的に知ることができて有益である。

各章の叙述はおおむね、①議論の前提となる政治過程やその制度的背景を分析する部分、②戦争の経緯を編年的に追跡する部分、③一連の経過を貫く軍事的諸要素を分析する部分、に大別される。この構成に即して、われわれが本書を一読したとき、まず①については改めて論究するまでもない既知の内容が多い、との印象を抱くであろう。これに対し②や③については、戦争における戦局の展開・軍構成（特に騎兵と歩兵の関係）・戦術・武具・攻城術・兵学・訓練など、われわれがあまり注目してこなかった論点の多様さが目を引く。この違いはもちろん優劣のつけられるものではない。ただ兵制・兵役の問題に集中してきた日本の研究が、政治史や制度史、社会経済史研究など、いわば「得意技」の流儀で軍事問題を整形し、枠づけてきたことはここから覚知されねばなるまい。

以上のような理由から、本書にはわれわれがすでに「十分すぎるほど深めてきた」部分と「ほとんど目配りしてこなかった」部分が並存する。したがって以下、各章の内容を紹介していくに当たっては、前者に当たる部分は簡略に留め、われわれが目を開くべき後者を中心に摘記していくこととしたい。

序言では、まず研究史の整理と本書のねらいが示される。西洋においてこれまで中国軍事史研究にあまり関心が向けられてこなかったのは、一九世紀の中国が軍事的工業的に後進と見られたためであった。論者の注目は近代（朝鮮戦争や近年の軍拡への関心）と古代（兵学とくに孫子への関心）に集中していて、中間の時代、特に魏晋～唐五代は置き去りにされているという。一方、中国・日本の研究は兵制が中心である。戦史研究としては、軍事組織と関係の深い研究機関や出版社が刊行した叢書類があるが、学術的な手続の面で問題が多い。そこで本書は、中国と西洋の懸隔を埋め、中世における戦争・軍制・社会変化の関連を解明することを目指すとする。

また議論の前提として時代区分、地域設定、人口・民族構成とその影響関係、史料の性質等に関わる著者の立場や所見が示される。なかでも諸史料に戦争記述が少ない理由については、記録を行う文官は戦争に知悉しないため叙述が紋切り型になりがちであり、武勲詩などでも戦闘描写が排除され、初期の準備や戦果等に力点が置かれる傾向にあったためとの見解を提示している。史料解釈にあたり、心に留めておくべき指摘と思われる。

第一章は、本論の前段階に当たる戦国秦漢期を扱う。春秋時代、戦車に乗った戦士貴族の間で行われた戦争は戦国時代に大きく変化する。人口と生産の増加にともない、農民を兵役で徴発する歩兵部隊が組織されるようになり、これが漢の兵制に結実していくという。兵器（鉄製武具）・戦術（騎射・攻城）の発達は戦闘の規模を日数・兵数両面で拡大させ、将帥は『孫子』などの兵書を学び、特殊な知識と訓練を積むことが求められるようになる。しかし武に対する文の優越はこのころから確立されており、司令官の権限は国家によって制約された。

こうした兵制は漢代、匈奴との戦争の過程で新たな転機を迎える。騎兵が重視され、常設化・専職化されるようになるのである。この傾向は武帝以後つよまり、光武帝は罪人や降蕃を用いて騎兵軍を組織した。旧来型の兵役は一部に限定され、一線の防衛は専職化していく。ところが常設化・専職化は地方分裂の契機を孕んでおり、地方官が自ら組織した軍団は朝廷も認めざるを得なかったため、それらの私兵化・軍閥化を導いてしまうという。

第二章では西晋の崩壊前後の状況が論じられ、当該時期における兵制の変化として、兵戸制、胡族騎兵、都督制が取り上げられる。まず兵戸制は、漢以来の兵士専職化の動き、さらには戦争長期化で長期戦や転戦に堪えうる兵種の要請が高まったことを背景に成立したと位置づけられる。百姓とは籍を異にする世襲的兵戸身分の兵源には、社会混乱のなか各地の豪族が部曲を組織してつくった自衛団や、土地を失った貧農・飢民・浮浪等が充てられたとする。

ついで内徙異民族を重要な兵源として注目する。漢代以降、南匈奴・烏桓・羌・鮮卑などが騎兵として重宝されるようになったが、必ずしも醇化がうまくはいかず不安定要因にもなっていく。また草原地帯における匈奴との戦いを主としていた漢代の騎兵が軽騎中心であったのに対し、内地での戦いが中心となった西晋頃までには人馬ともに装甲を施し、機動力より攻撃力を増強する傾向が見られるようになるという。

地方軍を指揮する都督については、各地に分封された諸王がこれを兼任することで軍事権を獲得し、彼らの抗争が西晋を崩壊に導いていく過程を跡づけている。

第三章は西晋崩壊から北魏統一までの北中国について、漢（前趙）、後趙、前秦、北魏の興亡、およびその間の戦争経過を詳述しつつ、議論が展開される。この時期、北方諸国は数に勝る漢族に同化されぬよう胡漢の別を鮮明にし、胡族アイデンティティを強調していた。兵制もその中核は胡族騎兵であり、漢兵は兵站や土木工事への起用にとどまったという。人口問題への対応から、戦勝時には大量の捕虜・強制移民がしばしば行われ、これを首都近くに集住させて中央統制を図ったが、周囲に分布する在地の自衛団（塢など）への支配は間接的なものにとどまったため、胡族国家はもろさを内包していた。また軍と国家があまりに近接していたため、軍事的敗北が国家の滅亡に直結しがちで、王権継承ルールの不在とも相まって、胡族国家は短命に終わることが多かった。

そして分裂を最終的に統一した北魏の成功は、草原を支配下に含んでいたことで軍馬供給に強みを持っていたこと、敵国の有力君主が北魏の台頭期に相次いで死去したこと、征服地の有力者を処遇して忠誠を引き出したことなどに帰せられるとする。特に征服先で推し進めた婚姻政策などの結果、隋唐につながる胡漢融合の新支配層が生まれたという。

第四章は東晋南朝期の南中国を扱う。貴族対国家、移住者対原住者、門閥対寒門などさまざまな対立軸から生み出される政治的混乱のなか、軍事面で注目されるのは、前代にひきつづき兵戸制と都督制である。人口が少ない南方において兵戸制を復興することは困難であった。民戸の一部を兵戸に改編すれば税源喪失につながり、貴族に隷属する部曲の兵戸登録を図れば貴族の反発は必

至だったためである（これを試みた刁協の兵制改革はかえって王敦の乱を誘発してしまう）。結局東晋が採用したのは浮浪層や未附籍戸、罪人、山岳系原住民などから新たな兵戸を得るという方策だったが、彼らは軍事的効果があまり見込めず、梁陳までには募兵が軍の主力となった。

都督制は従来と同じく中央による統制の成否が問題となったが、北府・西府等は建康に対してしばしば遠心的な動きを見せ、混乱のなかから台頭した軍閥による短命王朝が繰り返されていくことになる。劉裕以降、各王朝の創始者をはじめ、戦場経験を踏み台に寒門出身の武人が台頭したことは、この時代の特色として注目されるが、彼らは一旦権力の座に就けば文に帰すようになる。中世南朝に尚武を拠り所とする騎士が生まれなかった理由もここにあると指摘される。

第五章は、五世紀中葉から隋建国までの北中国の発展をたどる。北魏の平城時代には胡族が軍の中核を保持していたものの、孝文帝の漢化政策以降、北鎮の地位低下が顕著になって六鎮の乱が発生。その後、爾朱栄の専権期を経て、高歓・宇文泰の角逐に至る過程が跡づけられる。両者の間で繰り返された戦闘のなかでも特に注目されるのが、五四六年の玉壁城の攻防である。中世中国では、築城術など防禦技術の向上が守備側の攻撃側に対する優越性を確かなものにしたため、堅固な城壁、強い守備兵、十分な補給があれば、攻陥するのはきわめて困難になったという。玉壁を攻囲した高歓は結局攻めきれずに撤退する。両国の戦闘がこののちしばらく沈静化するのは、攻撃側の不利を双方が認識するようになったためと推測する。

次いで注目するのは両国の軍編成の違いである。高歓の軍は旧六鎮、爾朱栄の余党、北魏の旧禁兵などから成っていたが、漢兵には信を置いていなかった。一方、兵力に劣る宇文泰は郷兵を率いる漢族有力者と提携し、混成部隊化を図るほか術がなかった。郷兵を国軍に取り込みつつその権限を中・下級指揮権に留め、その上に二十四軍を置くのが西魏・北周の軍制であった。そして胡漢融合の成否が、両国の興亡の鍵を握ったと見なされている。

なお議論の分かれる西魏二十四軍制について、著者は次のような理解を示す。まず郷兵集団の統属関係が新兵制のなかでどれだけ温存されたかについては、長期的にみれば次第に郷帥を排し、国家が直接徴発するようになっていくとし、五七四年に北周武帝が百姓から大規模に兵を募ったこともその延長線上で理解する。また府兵制が常設の専門兵か農民が臨時に徴発されるものかについては、胡漢別立ての複合的な体制を想定することを一案として提起している。

第六章は、東晋以降に交わされた南北間戦争の展開を詳細にあとづけ、三〇〇年近くにわたって双方が再統一への決定打を欠いていた原因を軍事技術の面から分析する。

まず南が失地回復を果たせない理由として、軍構成の面では、南が歩兵中心で騎兵が少なく、機動性や攻撃力に乏しかったことを挙げる。ついで補給の面で南が依存した水運が、干害や敵軍による兵站拠点の占拠などに対する脆弱さを孕んでいたことが述べられる。さらには戸口の少なさ、内紛の多さ、南方の原住民に北伐の意志が希薄だったことなどが指摘される。

ついで北方諸国の方は、分裂期には他国と、統一期には国内の

他族と主に敵対していたため、南征が主戦略となりにくかった。また軍構成の面では、騎兵が攻城戦を不得手にしていたこと、水軍による戦闘技術に限界があったことを挙げる。隋が陳の征圧に成功したのは、晋の呉併合を範とし、巨大な水軍を準備したためであるという。

なお関連して、当時の軍船と水戦を分析した部分にも注目しておきたい。当時の軍船は衝角を持っていないが、これは水戦が体当たりではなく、射撃や敵船に乗り込んでの戦闘を主としていたことに対応するという。また火船などの例外を除き、守備重視の装甲船が用いられたこと、軍船は戦闘そのものよりも物資や兵士の輸送に多く用いられていたことなども合わせて指摘される。

第七章は、隋の兵制と対外戦争を論じる。兵制についてはまず、陳征圧後、文帝が実施した武器の回収・私闘の禁止・軍船の没収等の軍縮政策を紹介し、ついで①五九〇年の府兵制改革、および②大業初年に行われた煬帝の兵制改革を分析する。個々の分析は日中の研究成果とおおむね重なるものであるが、著者は①における驃騎将軍・車騎将軍の権限抑制、②における総管府廃止（軍府をすべて禁軍諸衛配下に一本化）・鷹揚府の南方増設（敵対有力者の制度内編入）等、地方軍事力の中央化に特に注目した叙述を展開している。

対外戦争についてはまず突厥との攻防をあとづけ、西晋以来の重装騎兵が遊牧民との戦闘には不向きだったこと、草原への遠征が兵站問題を克服できなかったこと等から、隋は十分な対応をとれなかったと分析する。

数次にわたる高句麗遠征についても経過が詳細に考察され、未完に終わった原因として、補給の途絶、疫病の流行、気候問題への無知、災害等を抽出する。加えて戦局追跡の間に挿入される、軍構成、兵站（大運河の開削）、軍装、兵数、出征儀礼、驍果制などの分析も詳細にわたり、それぞれに味読すべき示唆を内包している。

第八章は隋末の群雄の分析と、そのなかから唐が勝ち残っていく過程、および当時の戦争の特色が検討される。まず隋末の群雄はその起源から、①盗賊集団、②郷兵、③隋の地方官、に大別され、①は地方政権として安定すると保守化すること、②③は隋に対する人々の反発心を盗賊制圧に活用し、最後は革命志向を帯びることを指摘する。そして九人の群雄を取り上げてそれぞれの出自と軍閥間で行われた戦いの経過を詳述する。

なかでも李世民の戦いぶりは詳細に分析され、高い評価が与えられる。彼の戦術は、激戦を回避し、小部隊で兵站を攪乱しつつ（敵軍を懐に引き込んで兵站を延ばさせ、自軍は兵站の短い状態を保つ）敵の疲労を待ち、戦機と見るや一気に攻撃を仕掛け、容赦ない追尾で勝利を収めるという傾向があるという。また彼の戦闘計画のうち注目すべき点として、彼自身と騎兵の役割を挙げる。前者は戦略の慎重さに比して実戦では陣頭指揮をとっていること、それが他の将帥にも通じるこの時代の特色であること。後者は騎兵を偵察・後方攪乱・追尾に用い、それまでの重装騎兵ではなく軽騎だったことを挙げる。

第九章は、唐初の兵制と、唐が中国統一後に展開した北方作戦（東突厥・高句麗）の経過に論及する。このうち東突厥への遠征については、突厥の内紛に乗じて司令官の李靖等が勝利を収めて

いく過程が跡づけられる。そしてその間、唐側が遊牧民並みの軽騎を用いたことにも着目する。

この遠征軍にも参加したであろう府兵制については、組織改編、上番・防人制度、徴兵原則等について、通説に即した説明をしたうえで、府兵たちが一生にわたる就役義務と訓練への参加を求められていることから、その性格は民兵ではなく職業兵と見るべきと主張する。また有事に組織される行軍は、府兵、兵募、蕃兵から成っていたという。行軍についてはさらに李靖が残した著述から、組織・訓練・陣形・偵察・指令伝達・軍律・戦術・鹵簿・陣営配置などさまざまな側面が紹介される。

第一〇章は府兵制崩壊から常設の募兵軍創設までをたどる。この過程についてはおおむねこれまでの研究を踏まえた説明となっており、七世紀後半以降、高句麗・新羅・東突厥・吐蕃など周辺各国が台頭したことから辺境軍の常駐化が求められるようになり、これに不向きな府兵・兵募から、長期従軍の可能な健児・蕃兵への転換が進められ、彼らを統合する広域司令官として節度使が創設されるまでの流れが、丁寧に紹介される。

募兵制については、常駐する経験豊かな兵が国防を担うという有効性の一方で、コストの高さや、中央に反攻した場合のリスク等が指摘される。割拠防止には長期就任の防止や監軍派遣等の措置がとられたが、李林甫の蕃将起用政策のなかで台頭した安禄山にはこれらが適用された形跡がなく、その反乱を導いてしまうとされ、以下反乱の経緯が克明に再現されていく。

第一一章は、安史の乱が後世に与えた影響を分析する。内地に現出した藩鎮割拠状態については、藩鎮内部の権力構造（節度使と牙軍の関係、仮父子結合等）や国家の抑藩政策（監軍派遣、神策軍強化等）などの面から、先行研究に依拠した説明がなされる。こうしたなか宦官が重視されたり、文官が武職に就任したりする傾向が強まるのは、武官に対する不信の反映であったとする。そして軍事指揮に対しては、唐前期には戦場での個人的リーダーシップが強調されたのに対し、後期には行政力や人間関係への理解が重視されるようになるという。

そして五代期には唐代より強化された親軍が創設されるようになるが、後周・宋の革命からもわかるように、それが不安定要因にもなりえた。宋はその統制に成功するが、対外的に見た場合の軍事的弱さを指摘されるようになるという。

最後に結語では、以上の議論の総括を踏まえ、同時代のヨーロッパ（特にビザンツ）との比較が行われる。まず共通点としては熟練した文官支配にもとづく貴族制・官僚制を持つこと、古典文明の継承者であることが、相違点としては中世欧州諸国は国家ベースで財政問題を処理できる官僚を持っていないことが挙げられる。

軍事技術の面での共通点も多い。たとえば騎兵を主力とし、歩兵がこれを補うという軍構成や、進軍中に輜重警護の配置がなされること、古典的な兵書が重視され、しばしば作戦の典拠として引用されること、戦争を地位向上の足がかりとしてとらえる姿勢、危険を回避し最善のときが来るまで開戦を引き延ばすこと、対遊牧民戦争の経験を積み、その影響から伏兵戦術を好んで採用したことなどが指摘される。一方、軍の支持が皇帝にとって不可欠だったビザンツに比べると、中国の武人は体制に馴致されている点、

中国の皇帝はビザンツに比して従軍経験が圧倒的に少ない点などは、違いの顕著なところであるという。中国では軍事貴族は育たず、エリートたちも武力に依存しなかった。それは中国において、儒教を中心とする古典の文化的遺産の影響が大きかったためと結論づけている。

以上の概観からもうかがえるように、本書には日中の研究者がこれまで関心を寄せてきた兵制や兵役の問題に対しても相当の言及が見られる。府兵制を例にとるなら、胡漢の二元性を制度理解に盛り込むべきとの主張（第五章）や、職業兵の枠組で理解すべきとの見解（第九章）が示されている。軍の構成を主力部隊（実戦）と支援部隊（土木・運輸等）、騎兵と歩兵、職業兵と徴兵（民兵）、胡族的要素と漢族的要素など、複合的に把握しようとする姿勢は、府兵制に限らず本書全体に貫かれている。そして恒常的な臨戦態勢を維持するには専職化された兵員が必要であり、「兵農一致」原則に基づいて徴発される部分は補助的な役割に留まるとの認識が諸処で示される。これを時系列に即して整理すると、戦国から前漢にかけて構築された兵農一致体制を除けば、後漢に始まり、魏晋南北朝の兵戸制、西魏～隋唐の府兵制、そして唐宋変革期の募兵制に至るまで、ほとんどの時期において専職化された兵員が主力として想定されることになる。しかも多くの時期において、兵員に相応の栄誉・待遇が与えられているとの理解がなされている。

日本や中国においても、府兵制の特に胡漢融合的な側面にはこれまでも注意が払われてきた。また氣賀澤保規氏の「兵民分離」論（兵役負担者が非番時に農耕に従事する「兵農一致」状態にあることは認めつつも、兵役義務を負う府兵が兵役負担の全くない一般農民と別立てされていること、すなわち「兵民分離」状態にあることをより重視する）や、渡辺信一郎氏の新説（兵農一致・兵民一致説に立つものの、「府兵義務＝軍府州の編戸農民の負担」「防人義務＝一般州府の編戸農民の負担」として、兵役負担を二系統に区別する）など、当時の兵制を複合的に理解する傾向は（主張の方向性には各説隔たりはあれども）、近年ますます強まっている。

ただし、本書における日本の研究の参照は一九九〇年代初頭までにとどまっており、このような最新の成果に関する情報の相互交換は必ずしも十分ではない。したがって日本で議論されている兵役負担の複合性と、本書で示された軍構成の複合性とをつきあわせることで、より包括的・建設的な継承・深化を図っていくことが期待できる。

だがこうした「馴染みの議論」以上に、本書から読み取るべきは、冒頭にも述べたように従来われわれが直視してこなかった数々の論点から得られる示唆の方であろう。このなかには騎兵・歩兵の役割分担や装甲の変化など、全巻をとおして通時的な展望を得られる議論もあれば、攻城戦術（第五章）、出征儀礼（第七章）、陣形や指令伝達（第九章）など部分的な掘り下げにとどまるものもあるが、いずれも武力本体に深く関わるテーマである。

第一章で著者が述べるように、中国軍事史は、戦国時代における戦車から歩兵・騎兵への変化と、近代における西洋軍事技術の導入という二度の転換期で分節できるという。こうした技術的画

期性とも連動してか、古代の軍事史研究では儀礼や兵器に表象されたシンボリズムの解析から国家形成と武力の関係を見通す視角が広く共有され、片や近代史の方では「戦争と記憶」などの論題を通じ武力がオーソライズされる過程の解明に多くの力が注がれてきた。そうした動向からも透視されるように、古代史・近代史とは武力そのものに接近する方法論を豊かに育んできた分野であった。

ひるがえって両期に挟まれた約二〇〇〇年間は、著者も言うように軍事技術上の目立った変化が乏しく、十分顧みられてこなかった。しかし考えてみれば、軍事史といえばまず手を着けられるべき各種の兵書（中世でいえば『通典』兵典、『李衛公問対』、『太白陰経』など）が、歴史史料として埃をかぶっているのは不思議な話である。本書で検討された軍事の技術的側面や、上記の古代史・近代史の方法論など、少しく異質な枠組にもときに目配りしつつ、武力そのものに焦点を当てる方法を探っていくことが、いま求められている。

(Routledge Taylor & Francis Group, London and New York, 2002, pp.x＋288)

（島根大学准教授）